

## 大学教育におけるボランティア活動の意義と 授業開発・実践・評価

—「ボランティアセンター」設置に向けて—

石井三恵・篠原 收・小田 長・石田裕子

(2008年11月6日 受理)

Meaning of Volunteer Activities in University Education,  
Development, Practice and Evaluation of the Volunteer Theory Class  
— For the Establishment of the Volunteer Center —

Mie ISHII, Osamu SHINOHARA, Takeshi ODA, Yuko ISHIDA

### Abstract

In recent years we have received a number of inquiries from students related to the possibility of engaging in volunteer activities. We understand that many students are eager to make a positive and meaningful contribution to society, but in some cases they are unsure about how to go about it. In an effort to respond to students' desire to participate in volunteer activities, one of the writers of this paper, who is in charge of coordinating an induction class called Voluntary Theory, has built up a cooperative network of those within the campus who possess a voluntary spirit. They have discussed how best to support students' volunteer activities, including a look at the possibility of systematically combining lectures with off-campus volunteer activities. A plan to establish the Volunteer Center is also under way with an aim to facilitate students' volunteer activities. This paper is a report on the discussions regarding the support for volunteer activities at Hiroshima Jogakuin University in the 2008 academic year, and also an analysis of it from the viewpoint of faculty development.

---

## I はじめに

近年、学生からボランティア活動をしたいが、どこに行けば活動できるのか、何から始めるとよいのか、あるいは自分に何ができるのかなどがわからないといった相談が相次いでいる。彼女たちの問いかける姿勢は真摯であり、単なる好奇心からだけでなく、他者のために自らができることを行いたいという気持ちに溢れている。また、その積極的な気持ちと表裏一体の関係で、果たして自分は活動についていけるだろうか、希望を言い出したけれども本当に動けるのだろうかという不安も内在している。

2008年度、本学におけるインダクション科目「ボランティア論」のコーディネーターとして、急遽担当することになった筆者のひとりが試行錯誤する中で、まずは学内関係者にボランティア精神を発揮してもらうことで、学内協力者を得た。さらに、学内協力者とともに講義そのものを組織化していく過程で、学外関係者との折衝と実習などの運営や学生たちと培ったボランティアのあり方を学内協力者間で議論してきた。

本稿は、本学におけるボランティア活動支援のあり方に関して、その基盤を形成し、新たな教育展開をめざして、学内協力者との間で、これまで議論してきた研究成果であり、授業開発実践・評価といったファカルティ・デベロップメントの観点に立った考察である。

## II 高等教育におけるボランティア活動

### 1 高まるボランティア活動

「ボランティア」ということばが盛んに使われているように思われるが、日本では第二次世界大戦前まで、地縁や血縁を中心とした相互扶助的な地域社会（隣近所）があり、そこでの自然発生的な助け合いや分かち合いは当然のように行なわれてきた。いわば、ご近所中心のボランティア活動である。60数年経過した今もこのような環境が残っている地域もあるが、高度経済成長期を経て、都市化、国際化の進展は、伝統的な相互扶助の精神を弱めてきている。

今日においては、ボランティア活動の定義もとらえ方がさまざまであり、あいまいになってきてはいるが、まず理解しなければならないことは、ボランティア活動には行為側と被行為側がいること、つまりボランティア活動を行なう人とそれを受け入れる人、どちらも人間として存在しているということである。そして、行為側にも被行為側にも共通の理解が必要である。第一に、ボランティア活動は慈善的な無償の労働ではなく、安価な労働力でもない。第二に、行為者が自発的に行なうものであり、組織からの拘束力や強制力をともなうものでもない。第三に、行為側も被行為側も人間であることから、その関係性は対等であり、被行為者に対して

「してあげている」という行為側の優越は存在しない。

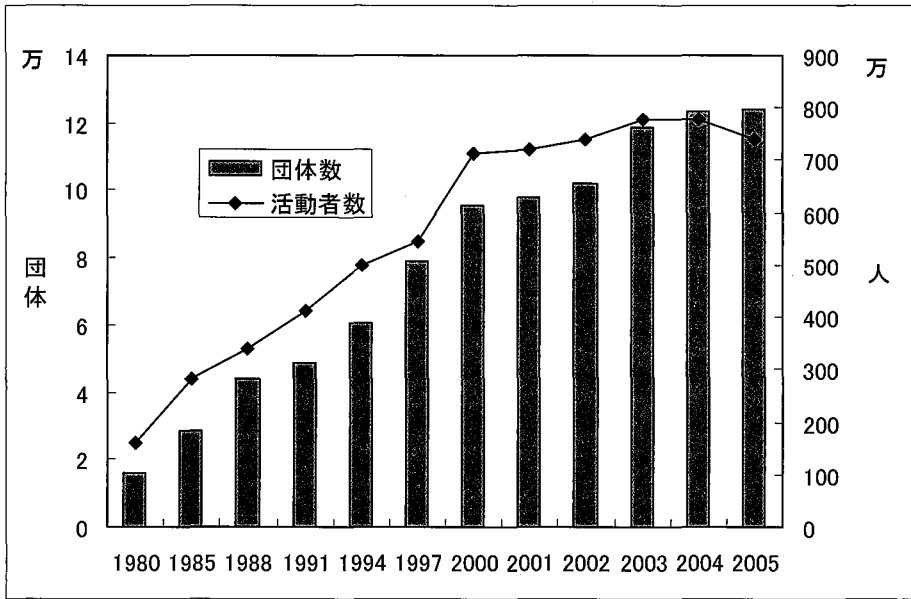
以上の点を挙げると、堅苦しく身構えるような反応を示すこともあろうが、今すぐにも取り組むことが可能なボランティア活動は、私たちの身の回りに数多く存在するというところにまったく気がついていないだけである。行為側が「できることを・できるときに・できるだけ」、そして長く続けられるということが大切であることを強調すべきであり、ボランティア活動を通じて行為側にとって学ぶことの方が多いいことも伝えていかなければならないことである。

一方、ボランティア活動の特徴として、新たな概念が指摘されるようになってきている。1995年1月の阪神・淡路大震災でのボランティアの活躍ぶりから、1995年を「ボランティア元年」と呼ぶ人も多く、そこででの教訓を活かしてボランティアの意味を捉え直す機会が増えてきた。そこで生まれた新たな概念とは、先駆性、補完性、自己実現性である。

まず、先駆性とは、既存の社会システムに存在しない役割を担うことが多いということである。次に、補完性とは、既存の行政システムでは対応しきれないニーズを満たすことである。ここで問題にすべきことは、先駆性と補完性に着目した既存のシステムがボランティア活動を安価な労働力とみなし、利用する悪質なパターンがあるという点である。

また、自己実現性とは、ボランティア活動に参加する個人の自己実現の場として、ボランティア活動が役割を果たすことを意味している。活動中のさまざまな経験を通して行為側に学ぶことも多く、その結果、達成感を味わうことによって、自己肯定感や自尊感情 (self-esteem) を育むことも可能となる。ボランティア活動は、学校や企業外での社会において、協働を通じた自己存在の意味を見出す働きもある。

1995年が「ボランティア元年」とされ、1998年に「特定非営利活動促進法」が制定され、さらには国際連合において2001年が「国際ボランティア年」に採択されるなど、ボランティア活動への社会的関心は確実に高まってきたこともあり、2004年あたりまではボランティア活動に参加する人びとは増加傾向にあった。2005年には減少傾向がみられるが、これは市町村合併により、活動者数を把握できていないためである (図1参照)。



出所 全国社会福祉協議会 全国ボランティア活動振興センター

図1 ボランティア数の推移<sup>1)</sup>

善意で行なわれる社会貢献活動をより積極的に利用してもらうため、多くのボランティア団体は任意団体からNPO (Non-profit Organization) 法人への移行を図ってきた。おりしも、「ボランティア元年」以後、企業の社会貢献意識の高まり、生きがいの場としてボランティアの世界を選択するシルバー世代の増加、教育機関でボランティア実習を体験した子どもたちの成長などから、1998年3月に「特定非営利活動促進法」(通称、NPO法)が制定されたこともこうした流れに拍車をかけた。宗教活動や政治活動を主な目的としないことを前提に、公益のために活動することを目的とした法人格を有する団体として、社会的に認知されることとなったのである。NPOは時代の変化に合わせて12分野から、2008年6月30日現在、「保険・医療・福祉」「社会教育」「災害救援」だけでなく、「情報化の発展」「経済化の活性」などを活動領域とする17分野に分けられるようになった(表1参照)。

表1 特定非営利活動促進法による分類の変化

改正前	改正後
1 保健、医療又は福祉の増進を図る活動	1 保健、医療又は福祉の増進を図る活動
2 社会教育の推進を図る活動	2 社会教育の推進を図る活動
3 まちづくりの推進を図る活動	3 まちづくりの推進を図る活動
4 文化、芸術又はスポーツの振興を図る活動	4 学術、文化、芸術又はスポーツの振興を図る活動
5 環境の保全を図る活動	5 環境の保全を図る活動
6 災害救助活動	6 災害救助活動
7 地域安全活動	7 地域安全活動
8 人権の擁護又は平和の推進を図る活動	8 人権の擁護又は平和の推進を図る活動
9 国際協力の活動	9 国際協力の活動
10 男女共同参画社会の形成の促進を図る活動	10 男女共同参画社会の形成の促進を図る活動
11 子どもの健全育成を図る活動	11 子どもの健全育成を図る活動
	12 情報化社会の発展を図る活動
	13 科学技術の振興を図る活動
	14 経済活動の活性化を図る活動
	15 職業能力の開発又は雇用機会の拡充を支援する活動
	16 消費者の保護を図る活動
12 前各号に掲げる活動を行う団体の運営又は活動に関する連絡、助言又は援助の活動	17 前各号に掲げる活動を行う団体の運営又は活動に関する連絡、助言又は援助の活動

出所 内閣府NPOホームページ<sup>2)</sup> より加筆・修正

とりわけ、高齢者福祉分野のボランティア活動への関心が高まっている。2003年9月15日現在における我が国の65歳以上人口（推計）は2,431万人で、総人口の19.0%を占めており、人口およびその割合とも過去最高となった。65歳以上人口を男女別にみると、男性は1,026万人（男性人口の16.5%）で、初めて1,000万人を超えた。女性は1,405万人（女性人口の21.5%）で、男性より379万人多くなっている。老年人口指数<sup>3)</sup>は今後も上昇を続け、2025年には48.0%となり、生産年齢人口（15～64歳人口）のほぼ2人で1人の高齢者を支えることになると見込まれている<sup>4)</sup>。

## 2 高等教育機関における正規授業科目としての位置づけ

2000年、教育改革国民会議の最終報告で「教育を変える」17項目が提言<sup>5)</sup>され、そのひとつとして「人間性豊かな日本人の育成」をめざした奉仕活動が挙げられた。この提言を受け、文部科学省では2001年に「21世紀教育新生プラン」として、7つの重点戦略を設けた。このプランは、「新生日本」の実現をめざす最重要課題として位置づけられており、教育改革の今後の取組みの全体像を示すといわれている。

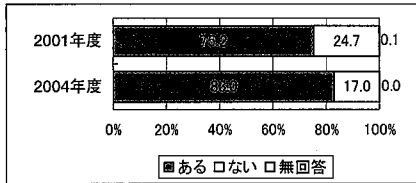
学校教育法、社会教育法が2001年7月に改正されたが、主なポイントは2点である。「奉仕活動・体験活動の充実」を受け、1点目は青少年のボランティア活動など社会奉仕体験の充実を図るための事業の実施、および教育委員会の所管事務として明記したこと、2点目は学校教

育と社会教育の連携である。その後、2002年7月、中央教育審議会から青少年の奉仕活動・体験活動についての答申があり、その中で奉仕活動・体験活動について個人や社会にとっての意味、推進の意義、活動の範囲などの整理がなされた。初等中等教育段階までの青少年、18歳以降の青年や勤労者等の個人の奉仕活動・体験活動の奨励のための方策、奉仕活動・体験活動を社会全体で推進していくための社会的な仕組みのあり方や、社会的機運を醸成していくための方策について答申されている。

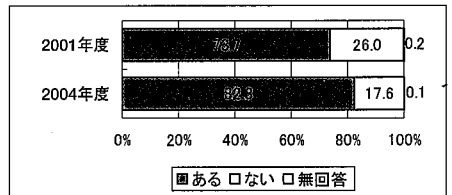
2006年には教育再生会議が設置され、第1次および第2次報告において高校生や大学生のボランティア活動の推進について言及している。大学生に対する奨励・支援として、大学などによる正規的教育活動として位置づけるためにボランティア講座、サービスマニエラ<sup>6)</sup>科目、NPOに関する科目の設置、学生の自主的な活動についての単位認定が求められている。学生の自主的な活動に対する奨励・支援策として、学生に対する支援体制の充実、たとえば相談窓口の設置、活動機会の提供などが挙げられている。また、学生が活動を行いやすい環境整備として、セメスター制度やボランティア休学制度などの導入、大学そのものを活動の場とする学内ボランティア活動の機会提供などである。

学生支援機構の調査では、相談窓口を設置する大学の割合は年々増加しており、約8割の大学に相談窓口が設置されている。ボランティア活動に対する大学の支援体制が整備されてきたといえるが、担当部署の状況においては、専任の部署や専任の担当者がある大学はわずかであり、ほとんどの大学では他の業務との兼任という状況である（図2参照）。

学外向け相談窓口の有無



学内向け相談窓口の有無



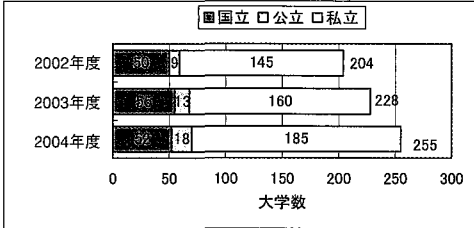
	2001年度	2004年度	内訳(設置者別)	
			国公立	私立
専任スタッフを有する専門の部署がある	2.2	2.3	0.6	2.8
ボランティアを担当する部署があり、 部署の中にボランティア業務専任の担当者がある	0.8	2.3	0.6	2.8
ボランティアを担当する部署はあるが、 部署及び担当者は他の業務と兼務している	87.8	88.1	92.9	86.6
その他	7.7	7.2	5.9	7.6

出所 独立行政法人日本学生支援機構

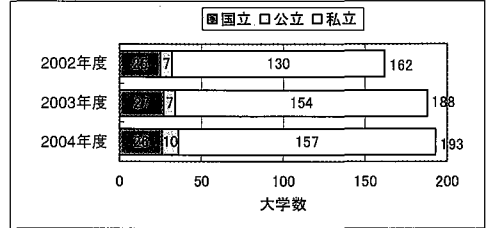
図2 大学におけるボランティア活動の相談窓口の設置状況<sup>7)</sup>

ボランティア活動などを取り入れた授業科目の開設状況は年々増えており、ボランティアに関する講義科目も開設している大学数も増加しているという状況である（図3参照）。

ボランティア活動を取り入れた授業科目を開設



ボランティアに関する授業科目を開設

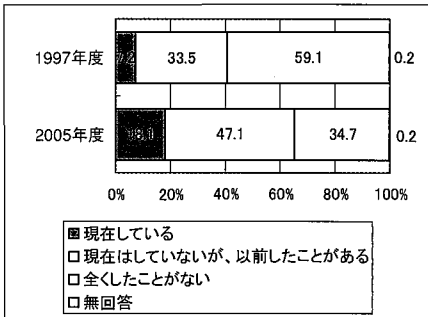


出所 文部科学省

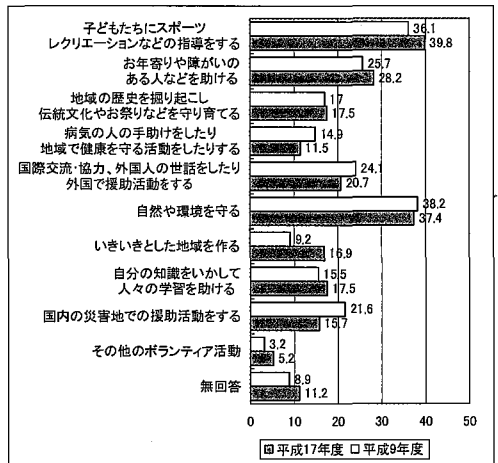
図3 大学におけるボランティ活動を取り入れた正規授業科目などの解説状況<sup>8)</sup>

大学生がどの程度ボランティア活動をしているかについては、活動を経験したことがあるという大学生は1997年度と2005年度を比較した場合、増加傾向がみられる。「現在している」という学生が2.5倍に増加しており、活動内容では子どもたちへのスポーツ・レクリエーションなどの指導、続いて自然環境保護活動、高齢者・障害者の支援、国内の災害地での支援活動などが多くなっている（図4参照）。

ボランティア活動の経験



ボランティア活動の分野



出所 独立行政法人日本学生支援機構

図4 大学生のボランティア活動状況

### Ⅲ インダクション科目「ボランティア論」

#### 1 目標設定とシラバス作成まで

本学における2008年度「ボランティア論」は、2007年秋から始動した。「ボランティア論」の担当教員は、自らひとりで講義・演習を行うだけではなく、様々な観点からボランティアについて学ぶ機会を学生に提供するため、学内外の講師との連携を図るコーディネーターとしての役割も担うこととした。

コーディネーター担当者としては、2008年度の最終学習目標を講義および実習を通しての本学学生の達成感と自己信頼の獲得にあると位置づけた。次に、その目標に基づいたシラバス作成に際し、実習の有無および実習先の選択といった2つの観点から検討した。具体的には以下4つの項目について順次検討を重ね、シラバス案の完成をめざした(表2参照)。

表2 「ボランティア論」2008年度実施計画(案)

概 要	
第1回	オリエンテーション
第2回	ボランティア総論1：ボランティアとは
第3回	ボランティア総論2：生きがいとは
第4回	ボランティア総論3：子ども向けプログラム作成に関して
第5回	ボランティア総論4：生涯学習の視点で
第6回	国際ボランティア1
第7回	国際ボランティア2
第8回	ボランティア計画
第9回	ボランティア実習：3コマ分
第10回	ボランティアを通して1：まとめ (グループワーク：パワーポイントスライド作成)
第11回	ボランティアを通して2：まとめ (グループワーク：プレゼンテーション準備)
第12回	ボランティアを通して3：プレゼンテーション



第一に、最終目標を達成するために設けた「授業の目的」である。「ボランティア論」に興味のある学生の多くは、ボランティア活動未体験者であり、初心者である。しかし、受講希望者はボランティアというものに触れてみたいという活動体験を積極的に望んでいることは明らかである。したがって、実習対象の選択に基づいた実習先が必要となると判断した。また、「お客さん」としてすべてが準備されたボランティア活動に「参加」するのではなく、本学学生が主体的に計画を立てながら推進していくことも許容範囲であることが望まれる。しかしながら、その多くが未経験者ならびに初心者である本学学生に、初歩的といえども「参画」までには至らないことは明らかである。「参加」ではない「参画」に触れるためにも、学生自身が「できる」内容に限定されるということになる。さらに、成し遂げたという達成感と満足感をその後の学生生活へと持続していくためにも、自己内省のためのプレゼンテーションの時間を実習後に設けることとした。

以上のことを踏まえて、シラバスに記載するため以下のように「授業の目的」を設定した<sup>9)</sup>。

「ボランティアということばが浸透してきた社会であるが、実際にボランティア活動に参加したいと願っても、参加する方法や機会を知る人は少ない。一方で、ボランティア活動に参加した人々は生きがいを感じ、自分の人生を楽しんでいるという。

ボランティアの定義を考えながら、参加から「参画」へ移行していく自分自身となるため、講義とワークショップおよびボランティア実習を通して、ボランティアのあり方を学ぶ。」

第二に、ボランティアの意義を確認しながらの内容把握だけでなく、国内外のボランティア経験者あるいはボランティア活動そのものを企画・立案・遂行している方に、その経緯と現状、及び課題を論じてもらうことの必要性も感じた。講演者は、本学学生のロールモデルとなるような女性、とりわけ適任者を卒業生の中から選択することを第一優先とした。

第三に、ボランティアに「参画」するためには、理論に裏打ちされた実践の必要性から、実習をとまなうこと目標とした。これまでの受講生数の平均的推移からすると、2008年度も20名程度と予測されたので、実習先は1ヶ所とした。これは、担当教員が引率者も兼ねるため、実習先を分散することなく、受講生全員を一団体として実習先に受け入れてもらうためであり、同時に学生の安全性を確保するためでもあった。

第四は、数あるボランティア活動の分野から、本学の学生にとって最もやりがいを感じる内容を選択することであった。その際、本学学生を安全・安心な環境に置くことは、被行為者をも安全・安心な環境に置くことになる。被行為者は子ども・高齢者・障がい者であるからである。高齢者・障がい者を補助する方法を具体的に習得する機会を設定することは時間的余裕がないため、最終的には特別な補助を必要としない「子ども」を被行為者とすることに決定した。また、実習は1日かけて行うものとし、実習先までの移動時間を除外し、正味3コマ分（1コ

マ=90分講義・演習)となるよう、時間内で完結するプログラムを組み立てる必要性も生じた。

実施計画案(表2参照)を基に、学内の該当部署へ協力を求め、学内協力者を得て、さらにはその学内協力者から学外講師の紹介に至り、数回に及ぶ話し合いの後、各回の講義担当者を決定した。ここでようやく準備段階が終了したのである(表3参照)。

表3 学生配布用「ボランティア論」シラバス<sup>10)</sup>

講義名	ボランティア論		
配当年次	2年		
単位数	2		
開講対象学科	文学部日本語日本文学科/文学部英米言語文化学科 文学部幼児教育心理学科/生活科学部生活デザイン・情報学科/ 生活科学部管理栄養学科		
授業の目的	ボランティアということはが浸透してきた社会であるが、実際にボランティア活動に参加したいと願っても、参加する方法や機会を知る人は少ない。一方で、ボランティア活動に参加した人々は生きがいを感じ、自分の人生を楽しんでいるという。 ボランティアの定義を考えながら、参加から「参画」へ移行していく自分自身をなため、講義とワークショップおよびボランティア実習を通して、ボランティアのあり方を学ぶ。		
授業の計画	第1回	4/10	オリエンテーション:ボランティアとは 石井
	第2回	4/24	ボランティア総論1:生きがいとは 篠原
	第3回	5/1	ボランティア総論2:子ども向けプログラム作成に関して 小田
	第4回	5/8	ボランティア総論3:生涯学習の視点で 小田
	第5回	5/15	国際ボランティア1 JICA
	第6回	5/22	国際ボランティア2 小倉
	第7回	5/29	ボランティア計画 志賀
	第8回	6/1	ボランティア実習:日曜日の1日をかけての学外実習 (3コマ分) 志賀
	第9回	6/5	ボランティア活動を通して1:グループワークによるまとめ 石井
	第10回	6/12	ボランティア活動を通して2:グループワークによる プレゼンテーション準備 石井
	第11回	6/19	ボランティア活動を通して3:プレゼンテーション (コーディネーター:石井) 志賀
テキスト	1. 授業中にプリント配布		
参考書	1. 授業中に指示する		
成績評価の方法	出・欠席(遅刻)30%、実習に対する取り組み20%、個人およびグループワークによるレポートとプレゼンテーション50%を総合的に評価する。		
その他	実習は6月の日曜日を計画し、交通費・昼食代などを含め5,000円徴収する予定である。 詳細は、オリエンテーション時に伝える。		

## 2. 「ボランティア論」実習の準備を通して

2008年度の第1回目講義日には、予想をはるかに上回る68名の2年生以上の学生が出席した。本学では、シラバスを読み、受講したいと思う講義の第1回目を受講してから、登録するかどうかを決めることが許されている。担当者としては、ボランティア活動に興味関心を抱いている学生の多さに驚いたが、その後履修登録期間中、授業時間割の関係で「ボランティア論」を取れないことが残念だと伝えるため、わざわざ研究室を訪れてくる学生の多さにも驚かされた。その大半はボランティア未経験者であるが、第一にボランティア活動がどのようなものであるかを知りたい、第二に実際にボランティア活動を体験してみたい、第三に社会に対して何か貢献をしたい、第四に「自分にできること」を知りたいという思いを伝えに来室したのである。こうした思いは、第1回目講義に参加した学生も同じである。

第1回目講義をオリエンテーションと位置づけ、概要説明を行った。その際、繰り返すべき点は2点であった。1点目は楽しいだけのプログラムではなく、実習をとまなうものであり、対象者である子どもの安全を守る責任を感じることでできる学生とならなければならないということ、2点目は実習予定日に参加できない場合は、単位認定ができないということである。この説明で、運動クラブに所属している学生で対外試合日程が実習当日に決定している学生や、私事により都合のつかない学生が履修を諦めたのであるが、彼女たちは最後まで実習日程の変更はできないのかと懇願していた。ここでも、ボランティア活動に対する興味関心の高さがうかがえよう。結果的に、57名の登録となった。

次に、新たな問題点が浮上してきた。57名全員を実習させる実習先の確保と同時に、プログラムの変更が生じたのである。当初予定していた実習先は1ヶ所であり、被行為対象者である子どもの数に対するボランティア定員は最大20名と約束されていた。そこで、講義と並行して、学内協力者と相談をしながら、新たに実習を受け入れてくれる実習先を探し始めた。また、本学学生を少なくとも2グループに分けることにしたため、学生の安全確保のためにコーディネーター以外の引率者も学内協力者として確保しなければならなくなった。幸い、本稿筆者のひとりが、広島県内の地域で実習予定日に開催される「町おこし」企画があることを知り、その企画に受講生がボランティアスタッフとして参加することの交渉を始めた。「町おこし」の企画者は快く本学学生の参加を引き受けてくださり、交渉に当たった本稿筆者のひとりが当日の引率を申し出てくれた。当初、めざしていた「参画」ではないが、「参加」を通して「参画」意識を見出すため、学生一人ひとりに何ができるかということを考えることを新たな課題とした。ひとまずは、実習先も決定し、ボランティアの心構えを説きながら、その意義を自分自身のものとしていく作業が始まったのである。

また、学生に実習プログラムの紹介を行った後、実習先について自ら選択させる方法を取り、

人数調整をした。予定されていた実習先での本学学生受け入れは本来20名であったが、事情を説明し、交渉した結果、最大25名までの受け入れを許可してもらうことができた。学生も理解を示し、ボランティア精神を発揮し、自ら手を挙げることで、驚くほど簡単に人数調整もでき、素晴らしい瞬間を学生たちは共有することができた。最終的に、元來の実習先Aに23名、新たな実習先Bに34名となった。

ここで、実習費について触れておく。例年、参加費として5,000円徴収していると前任者からの申し送りがあったので、今回も同額を徴収すると仮定して、「交通費（高速代など含む）・昼食費・学生保険・その他」と項目立てし、試算した。交通費のバスチャーター代について、いずれの実習先も道幅が狭く、大型バスは乗り入れできないことが判明した。当初予定されていた実習先に中型1台、新たな実習先には中型2台と計算し、合計バス3台となる。ここで、本学学生の安全確保のため、引率者がさらに1名必要になり、学内協力者を募集したところ、本稿筆者のひとりが快く引き受けてくれた。

他に、本学学生がボランティアとして実習先で活動するにあたって、実習先からもボランティア行為者として認識されると同時に、学生自身もその誇りとボランティア活動をするという責任感を持つためにも、全員揃いのTシャツを作ってはどうかとコーディネーター担当者が学生に提案した。すると、そのデザインをやってみたいという学生が手を挙げ、たちまち全員が賛成した。学内協力者を通して紹介された業者とデザイン担当の学生が打ち合わせた。できあがったTシャツに、教室は歓声に包まれた。この代金も含めて計算しなおしたところ、実習費に余剰金が出たので、学生各々に返金した。

また、実習先Aに参加する学生で、その近隣に居住しており、現地集合を希望した学生には交通費を含めて返金した。この他、遠方から通学しているため、当日の集合時間に間に合わない学生への対処方法を検討、保険に関することやチャーター代など一連の支払い関係と手続きを行なうにあたって、事務的な業務を担ってくれる専門的な部署の必要性を実感させられた。今回、コーディネーター担当者が学内協力者ともに事務的業務を行ってきたが、コーディネーター担当者は、あくまでもシラバスを通した授業開発・プランニングと講義・演習に集中することが本分であり、こうした専門的な部署の存在は、「ボランティア論」受講生だけでなく、ボランティア活動を志願する学生のために必要である。

以上のように、入念な準備を重ねて実習に望んだ。

## Ⅳ ボランティア活動の推進をめざして

### 1. 学生アンケートからわかること

本学の「ボランティア論」を正規授業科目として定着させるためには、学生との協働が必要である。単に受講後の感想を尋ねるのではなく、学生自身が感じたことや疑問に思ったことを明確にさせ、次年度への課題とし、「ボランティア論」をより活性化させたいと考えたからである。アンケート調査票（付表1参考）を作成し、57名の受講登録者に対し授業終了時にアンケート調査を実施し、53名から回答を得た。そのうち、複数回答、無回答は省いた。

まずは、受講前の動機であるが、「ボランティア論」を受講しようとする学生は、単に単位取得のためというよりも、ボランティアに興味・関心を持っている場合が多い。「ボランティアに興味があったから」46%、「面白そうだから」32%と、約80%の学生はボランティア論の授業に対して、当初から肯定的な態度を示していることがわかる（図5参照）。

しかし、「単位になるから」12%、「他にとる授業がなかったから」8%、「その他（友人に誘われた）」2%と、特にボランティアに対して興味・関心を持っていなかった学生も22%存在した。

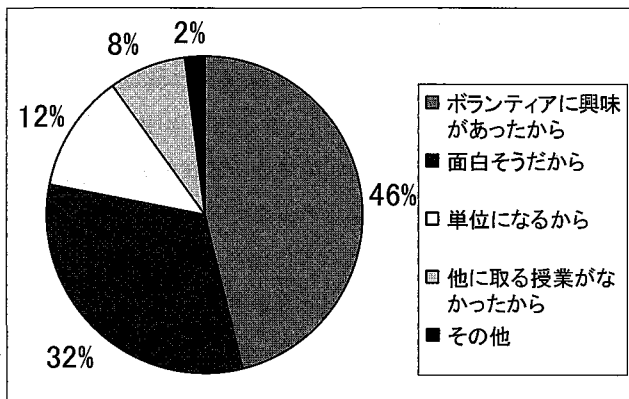


図5 受講動機

次に、受講前の実習に対する思いについて問いかけたところ、ボランティア実習に対する態度としては、「楽しそうだと喜んだ」を選択した60%は、肯定的であった。「特に何も思わなかった」の15%の中には、「ボランティア論であるから実習は当然で特に何も思わなかった」という意見もあった。しかし、「楽しそうだが面倒」21%、「面倒なので参加したくない」4%と、ボランティア実習に対して残りの25%は「面倒」という気持ちを抱いていることがわかる。

上記のように「ボランティア論」を受講する動機としては、約80%が肯定的な気持ちを持つ

ていたが、実習ではそれが60%となっている。そのうち、「実習が休日にあるのが面倒」「実習が不安」「ボランティアに堅苦しいイメージがあった」「子どもが苦手」など、ボランティアに対する興味・関心はあるものの、ボランティアを実行するのは「面倒」というイメージがある学生や、不安を感じて消極的になる学生がいるといえよう。

受講前の実習に対しては、子どもとどう接するかということ、ボランティアにおける基本的な注意点、実習先に関することを詳しく知りたいという意見があった。実習に対して不安を抱く学生が多かった(図6参照)。

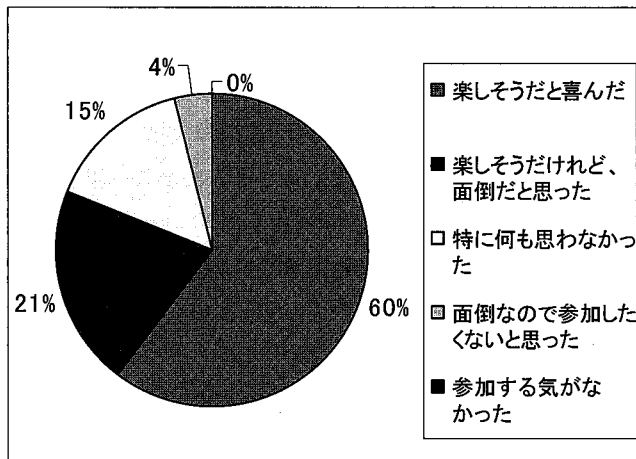


図6 実習に関して

次に、受講後の気持ちについてである。「ボランティア論」を受講した学生は、ボランティアに対して興味関心をはじめから持っている場合が多かった。しかし、それ以外の学生も含めて、「ボランティアに興味を持てた」65%、「本当に面白かった」35%と、アンケートに回答したすべての学生が、受講後の気持ちとして肯定的な態度を示している(図7参照)。

受講前は「単位になるから」「他にとる授業がなかった」という学生がいたにもかかわらず、受講後の気持ちでそのような回答をした学生はいなかった。ボランティアに対する興味・関心を持つきっかけとして、「ボランティア論」が一定の役割を果たしたといえよう。

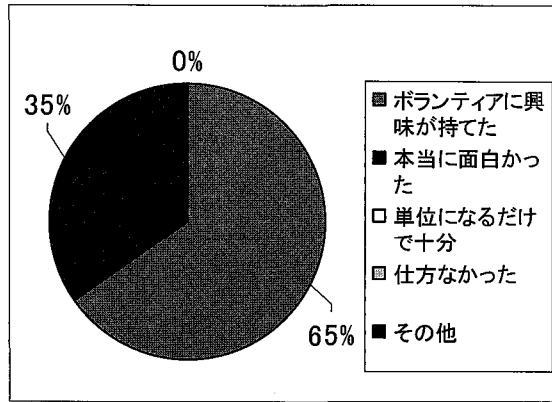


図7 受講後の気持ち

次に、受講後の実習に対する思いについてである。実習前は、実習に対して肯定的な態度の学生は60%であったが、実習後は「とても楽しかった」が86%となっている。「まあまあ楽しかった」6%、「楽しかったがしんどかった」8%をあわせると、全ての学生が実習に対して「楽しい」と感じたことになる（図8参照）。

「楽しくはなかった」「まったく楽しくなかった」という否定的な意見を持った学生は皆無であった。実習を通して、ボランティアに対する不安を払拭することができたと考えられる。受講生の意見の多くは、「自分自身が成長できた」「得るものが多かった」「ボランティアに対するイメージが変わった」「やりがいを感じた」「楽しめた」など、実習を楽しく過ごせたことによって、ボランティアに対する考え方が変わり、自己の成長にもつながったことを実感している。また、「実習をもっとやりたい」という意見も多数あり、実習に対する満足度は非常に大きかったといえる。

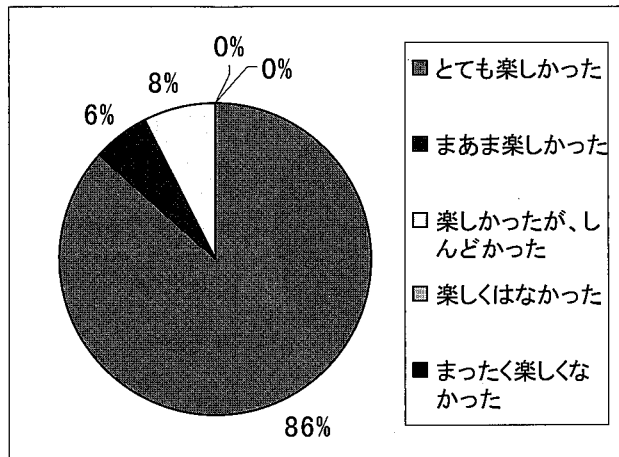


図8 実習を終えて

また、実習を終えた受講生は、今後のボランティア活動について90%が「ぜひ参加したい」と回答している。今後のボランティア活動に対しても積極的な態度を示している。「わからない」と答えた10%の学生のほとんどは、理由の欄に「忙しいため」と回答している。中には「できることもあるが、できないこともあるため」という意見もあった。全体的にボランティア活動に参加することに対する抵抗感は薄れている（図9参照）。

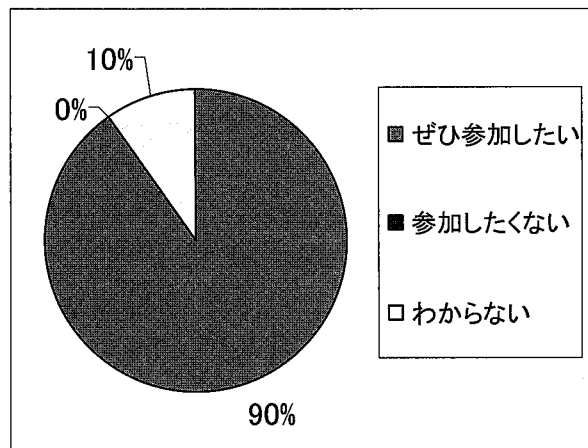


図9 今後のボランティア活動について

本学にボランティアセンターを設置することについての設問で、「絶対に必要」と答えた学生は66%、「わからない」と答えた学生は28%、「不要」と答えた学生は6%であった。ボランティアセンターが必要であると感じている学生が7割近く存在する。「わからない」と回答し



たものの、「できればあったほうがよい」とする学生もいた（図10参照）。

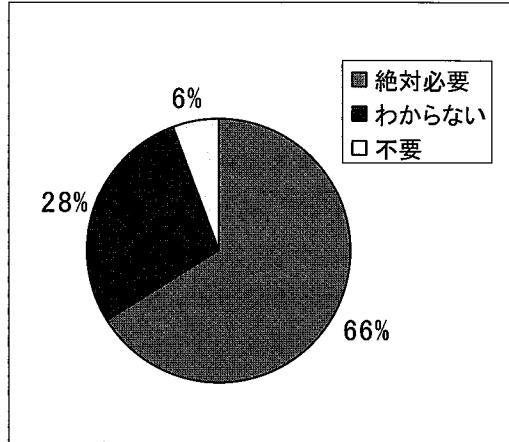


図10 ボランティアセンターについて

また、講義の内容で勉強になったものという設問に対して、「実習」が50%ともっとも多いが、国際ボランティアの国際協力機構（JICA）の国際協力専門員からの講義に興味を示す学生が33%と2番目に多く、学生の国際ボランティアに対する関心が高いことがわかった（図11参照）。

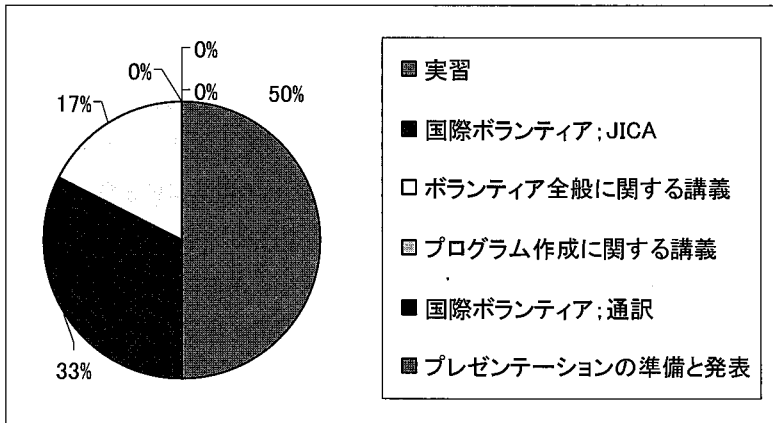


図11 最も勉強になったもの

授業に対する意見の中には、「もっと別のボランティアもしたい」「ボランティア論Ⅱを開講してほしい（講義数を増やしてほしい）」「実習を2，3回やりたい」「実習に対する知識を増やしたい」など、ボランティアに関する体験や知識をさらに深めたいという意欲が見られた。当然のことながら、それらすべてに対して授業科目を通して応えることは困難である。授業科

目ではある程度までの導入を行い、その後は自主的にボランティア活動に対して取り組むためにも、窓口としてもボランティアセンターが必要であるといえよう。

## 2. ボランティアセンターの設置をめざして

学生アンケートからもわかるように、学生の多くはボランティア活動そのものに興味を抱くだけでなく、ボランティア活動をしたいという熱意と希望を心底持っていることが理解できよう。本学のキリスト教関連科目などを通して、建学の精神（スクールモットー）である「神とともに働く（cum deo laboramus）」ことの大切さを在学中に理解しはじめているといえよう。したがって、広島地域において専門的な助力を求めている人びとに対してフォーカスを当て、聖書の教えにある「自分を愛するように、隣人を愛する」という奉仕の精神のもと、さまざまな地域社会への貢献活動（コミュニティサービス活動）を計画・実施し、本学生のボランティア活動を推進・支援することを目的とした部署である「ボランティアセンター」を設立することが必要ではないかと思われる。以下、その設置に向けた試案を示す。

第一に、本学において「ボランティアセンター」設置を構想するにあたって、「本学の建学の精神」「女性リーダー養成」「地域社会へのコミットメント」という3つを設置目標に挙げ、「ボランティアに関する学習、人材養成、人材の確保、キャリアアップ学習」を積極的に推進・支援することを主な業務とすることが求められる。

第二に、「ボランティアセンター」は、本学と地域社会を繋ぐ組織として位置づけ、学生がボランティア活動を通して地域社会に貢献し、社会参加の機会を持てる核となる組織となるように計画するべきである。学生は地域社会と接点を持つことで、社会性を身に付け、自己の学習目標・方向性を確認できるようになるからである。

第三に、「ボランティアセンター」が担う目標と業務を以下の7つに分類する。

1. 女性地域ボランティアの養成により、地域社会に、開かれた大学づくりの一翼とする。
2. 各種ボランティア養成公開講座開催により、地域貢献活動のコーディネーター・スタッフの育成を目的に、キャリアアップ、学習の機会を提供する。
3. 学生に対するボランティア活動の「場」の提供および地域貢献団体へのボランティア派遣を行なう。
4. ボランティア団体、社会教育関係団体および海外ボランティア団体、市内の他大学とのネットワークづくりを実施し、人材確保を行なう。
5. 広島県・広島市との協力および学生ボランティア連盟の結成などにより、学生ボランティアの養成に積極的に努める。
6. ボランティアによるイベント企画・計画づくり、たとえば「広島フラワーフェスティ

バル」実施本部事務局などとの関係による企画・計画づくりに参画する。

7. 「セルフチェック21」<sup>11)</sup>に沿った学生の資質向上をめざす。

第四に、実際にボランティア活動を推進していくためには、学内の学部・学科，宗教センター，学生課などから担当教職員を選定し，ボランティアセンター運営委員会を組織化することも肝要である。委員会において学生への紹介先団体を調査・分析することで，学生が安心して，安全にボランティア活動に参加できるように取り計らうことも可能となる。学生もさまざまなボランティア活動に，「できるときに，できるだけ」参加でき，ライフワークとしてのボランティア活動を見出し，生涯学習へと繋ぐことができる。ボランティア体験をすることは，組織・対人関係を学ぶ機会ともなり，社会性を育むことができ，キャリア教育にも繋がる。

また，「ボランティアセンター」では，広く協賛企業・団体等への参加呼びかけを行うことにより，資金的賛助組織を構築し，ボランティア本来の姿である自立した組織活動を展開できる維持支援組織づくりをめざしたい。

3. 「ボランティアセンター」設置後のボランティア活動の新展開

次に，「ボランティアセンター」設置後のボランティア活動の新たな展開の可能性について考察する。「ボランティアセンター」には，本学の特色からも「平和」「国際奉仕」「地域・福祉」「スポーツ・野外活動」「OG・社会人ボランティア活動」部会が設定できよう（図12参照）。学生が希望する活動ができるよう，また各部会において横断的活動ができるよう組織化することも重要となる。分野別活動について具体的に述べる。

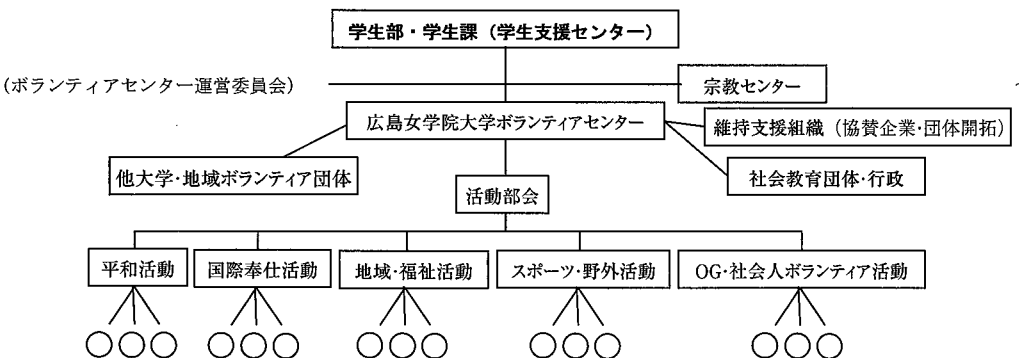


図12 広島女学院大学ボランティアセンター「アイリス (仮称)」組織図 (案)

「平和活動」であるが，「折鶴の会」<sup>12)</sup>などの活動を通して，国際平和文化都市および女性大学としての平和教育活動を実践する。大学間あるいは女性グループとのネットワークをテーマとし，「核兵器廃絶・平和文化・環境問題・食の問題」など本学に関連の深い分野に対して

活動を企画し、地域におけるリーダーシップを構築する。

現在、「広島フラワーフェスティバル」で実施されている「折り鶴みこし」プログラムにも本学学生が参加しているが、子ども会・地域と連携し、平和アピール・企画性ともに学生が活動するに適したものである。「ボランティアセンター」が「広島フラワーフェスティバル」への学生参加の窓口となることで、学生が発想する新たな企画での参加も可能となるよう働きかけることができよう。また、平和文化都市にある大学として世界へアピールするひとつとなる活動であり、「ボランティアセンター」の核となる活動になるとも考えられる。本学自治会との連携も図りながら、今後、「ボランティアセンター」がこのプログラムを受け継ぐことにより、地域と大学とを繋ぐ方策となると考えられる。

「国際奉仕活動」であるが、本学の専門性を活かし、海外における女性奉仕活動の実施可能性を検討し、国・思想・宗教・人権・民族・ジェンダーを超えて共に学び、共生をめざすグローバル社会を構築するために、海外における奉仕活動を計画・啓発し、実施する。とくに「平和活動」との関係を強めることで特色づくりが可能となる。本学卒業生も「被爆証言」「原爆展」などを通してこの分野で活躍している。広島の国際交流・協力団体との関係も必要となる。

「地域・福祉活動」であるが、「地域活動」については、本学周辺地域である牛田地区との協力関係をさらに深め、広島市内地域活動団体との協力をはじめ、小・中学校や行政に対する支援など幅広く活動する。行政区域を越えた地域活動に重点を置くことが、大学ボランティアとしての特徴ともなる。「福祉活動」については、学生たちが安心し、負担に感じることなく、福祉ボランティアを継続的に実施できるようにする。活動においては、学生数を確保するためにも、他大学学生ボランティアグループとの関係も重要となる。本学「ボランティアセンター」を窓口とすることで、地域ボランティア団体とのネットワークづくりに寄与できる。

「スポーツ・野外活動」であるが、近年、民間のスポーツクラブの増加にともない、そこでの活動が増加傾向にある。スポーツクラブが実施する活動において、ボランティア活動は限られており、スタッフ限定の場合が多い。本来、「スポーツ活動」については、「FUN TO SPORTS (スポーツを楽しむ精神)」があるべき姿であると思う。その延長線上に「CHAMPIONSHIP (勝敗にこだわる)」があるわけで、根性・スパルタ練習をする民間のスポーツクラブとは一線を画すべきであろう。したがって、ここでは「FUN TO SPORTS」であり、体を動かすことが好きな青少年育成を支援する組織へのボランティア活動となる。「野外活動」については、地球環境問題を意識した教育プログラム開発が焦眉である。

「OG・社会人ボランティア活動」であるが、学生時代にボランティア活動をしていて、卒業後も続けてボランティア活動を希望する本学卒業生 (OG) を対象とした受け皿をつくり、継

続的な活動が可能になるようにする。社会人となったOGもボランティア活動を継続できるようにすることは、本学への帰属意識の継続につながり、同窓会などへの参加促進を図ることにもつながる。また、ボランティア養成講座などを公開実施し、学生だけでなく、卒業生や地域住民への情報発信基地となることも可能であろう。

キリスト教主義教育をスクールモットーとする本学は、広島地域におけるボランティア活動の中核にいた歴史がある。とくに、女性ボランティアの半数以上は、本学学生や卒業生であった時代もあった。残念ながら、現在ボランティア活動を行なう学生は、市内他大学との比較において、決して活発とはいえない状況にある。しかし、2008年度の「ボランティア論」を受講した学生のボランティア活動への関心度の高さに、担当者として驚嘆した。それゆえ、学生たちが安心して、気楽にそして積極的にボランティア活動に参加することは、「セルフチェック21」がめざす学生の資質向上にも寄与できるものと確信する。

最後に、「ボランティアセンター」の設置・活動開始は、本学の地域社会に対するイメージアップおよびブランディング（ブランドづくり）にも直結する。広島地域の大学における先駆者としての「ボランティアセンター」設置は、ボランティア活動の広島地域での定着の一翼となると同時に、本学が地域社会の直面する問題に積極的にアプローチすることへの意思表示となり、大学の個性・特徴としての地域社会への挑戦・アピールになると考える。何よりも、学生がボランティア活動を通して、明るく、積極的になり、責任感を持つことで、自信を獲得していくものと確信する。

## V おわりに

2008年度「ボランティア論」にかかわった学内協力者が、学生のニーズに応えながら、なおかつ安全性を考慮に入れた授業を展開していくなかで、本学の発展的な未来予想図を描いてみた。ボランティア活動を実施したいという学生の思いに、今後ますます応えるためには、学内に「ボランティアセンター」を設置し、相談窓口の拡大などの環境整備も必要となろう。

学生のボランティア活動の活性化拠点、ならびに広島地域の「ボランティアセンター」としての機能の充実、また実習先の地域社会との連携など、今後の課題も多く、調査研究が必要となる。

## 【付記】

2008年度本学「ボランティア論」の実習を実施するにあたり、プログラム作成にご協力いた

だいた非常勤講師である人間科学研究所所長志賀誠治様に感謝申し上げます。また、急遽実習先として本学学生を快く受け入れてくださった安芸太田町井仁地区のみなさまに心より感謝申し上げます。

## 【注】

- 1) 全国社会福祉協議会 全国ボランティア活動振興センターのHPにて公開されている『2005年ボランティア活動年報（ボランティアセンター事業年報）[2004年度実績／2005年3月現在]』より作成した。2006年12月より、上記活動年報の1章、2章がネット上で公開されている。全国社会福祉協議会 (<http://www3.shakyo.or.jp/cdvc/>) とは、全国各地の社会福祉協議会のネットワークにより、福祉サービス利用者や社会福祉関係者の連絡・調整や活動支援、各種制度の改善への取り組みなどを行っている組織である。社会福祉協議会とは、民間の社会福祉活動を推進することを目的とした、営利を目的としない民間組織である。1951年に制定された社会福祉事業法（現在の「社会福祉法」）に基づき、全ての都道府県・市町村に設置されている。
- 2) 内閣府NPOホームページ (<http://www.npo-homepage.go.jp/>) 内のNPO法FAQ (A12) より引用した。
- 3) 老年人口指数とは、老年人口（65歳以上）の生産年齢人口に対する比率である。その計算式は、「老年人口指数＝老年人口（65歳以上人口）／生産年齢人口（15～64歳人口）×100」である。
- 4) 総務省統計局 (<http://www.stat.go.jp/data/>) による。
- 5) 教育改革国民会議による「教育改革国民会議報告－教育を変える17の提案－」 (<http://www.kantei.go.jp/jp/kyouiku/houkoku/1222report.html>) を参考にした。
- 6) サービスラーニングとは、アメリカで取り組みが始まった社会・地域貢献活動と知的学習を結びつける教育プログラムである。コミュニティ・サービスが地域でのボランティア活動に対して、サービスラーニングはその活動を通して学習するという教育に視点を置いている。日本においては、学生が自発的な意志に基づいて一定の期間、社会奉仕活動を体験することによって、知識と実際の体験から自分の学問的取組みや将来への新たな視野を得ることを目的として導入している大学もある。
- 7) 「大学等におけるボランティア情報の収集・提供の体制等に関する調査報告書」（2005年3月）より引用した。
- 8) 2004年度対象は697大学（国立83大学、公立76大学、私立538大学）である。全ての国公立大学のうち、大学院大学は除いた大学数であり、放送大学は私立大学に含む。
- 9) 2008年本学シラバスより引用した。
- 10) 学生にシラバスを見せるために、本学では学内ホームページに掲載するだけでなく、「Syllabus 2008」を配布している。「ボランティア論」の内容をさらに詳細に示すため、加工して、授業に配布したものである。授業計画の欄の右端は担当者名を記している。石井は本学生活科学部生活デザイン・情報学科教授であり、今年度のコーディネーターを務めた。篠原は同学科教授、小田は本学学生課課長であり、広島市社会教育委員として活動している。また、JICA（独立行政法人国際協力機構）からは井尚子さん、本学卒業生でもある「平和のためのヒロシマ通訳者グループ（HIP）」の代表小倉桂子さん、広島で環境教育プログラムを人間科学という視点で数多く手掛け、幅広いネットワークをお持ちの人間科学研究所所長志賀誠治さんにお越しいただき、担当していただいた。
- 11) 「セルフチェック21 (Self-Check21)」は、毎年年度初めに学力や人間としての自立など、学生が自己の成長度合いを自分で評価するために作られた21項目である。
- 12) 「折り鶴の会」とは、広島女学院中高職員であった故河本一郎氏が「平和の子の像」に献ずる折り鶴を保管し、記録する活動を開始したことから発足した。以後、広島女学院と「折り鶴」の関係は深い。

**【参考文献】**

1. 秦辰也『ボランティアの考え方』岩波書店 1999年
2. 国際ボランティア貯金普及協会編『ひと・まち・地球 ボランティアのすべて』2000年
3. 田尾雅夫・川野祐二『ボランティア・NPOの組織論』学陽書房 2005年
4. 内海成治他編『ボランティアを学ぶ人のために』世界思想社 1999年
5. 日本ボランティアコーディネーター協会『ボランティアコーディネーター白書-2003・2004年版』大阪ボランティア協会 2004年

【付表1】アンケート調査票

2008年度「ボランティア論」アンケート 1

2008年6月19日

「ボランティア論」に関する受講者のアンケートです。受講前と受講後の気持ちの変化を教えてください。本年度受講者であるみなさんの意見を来年度に反映させるための資料としたいと考えています。該当する個所に丸をつけてください。

担当：石井

受 講 前	受 講 後
<p>1 受講動機</p> <p>① ボランティアに興味があったから</p> <p>② 面白そうだから</p> <p>③ 単位になるから</p> <p>④ 他に取る授業がなかったから</p> <p>⑤ その他( )</p>	<p>2 受講後の気持ち</p> <p>① ボランティアに興味が持てた</p> <p>② 本当に面白かった</p> <p>③ 単位になるだけで十分</p> <p>④ 仕方なかった</p> <p>⑤ その他( )</p>
<p>2 実習に関して</p> <p>① 楽しそうだと喜んだ</p> <p>② 楽しそうだけれど、面倒だと思った</p> <p>③ 特に何も思わなかった</p> <p>④ 面倒なので参加したくないと思った</p> <p>⑤ 参加する気がなかった</p> <p>その理由</p>	<p>2 実習を終えて</p> <p>① とても楽しかった</p> <p>② まあまあ楽しかった</p> <p>③ 楽しかったが、しんどかった</p> <p>④ 楽しくはなかった</p> <p>⑤ まったく楽しくなかった</p> <p>その理由</p>
<p>3 実習に行く前の疑問点、改善点など</p>	<p>3 実習に関する改善点など</p>
<p>「ボランティア論」を終えて、貴女が思いつく授業の改善点を自由に書いてください。</p>	<p>4 授業の中で最も勉強になったもの</p> <p>① ボランティア全般に関する講義</p> <p>② プログラム作成に関する講義</p> <p>③ 国際ボランティア：JICA</p> <p>④ 国際ボランティア：通訳</p> <p>⑤ 実習</p> <p>⑥ プレゼンテーションの準備と発表</p> <p>5 今後のボランティア活動に関して</p> <p>① ぜひ参加したい</p> <p>② 参加したくない</p> <p>③ わからない</p> <p>その理由</p> <p>6 活動拠点として、本学に「ボランティアセンター」の設置は必要だと思いますか</p> <p>① 絶対必要</p> <p>② 不要</p> <p>③ わからない</p>

♪♪♪お疲れ様でしたね。みなさんは、本当に良くがんばってくれたと思います。実習を通して、自らが動かなければ何も始まり何かが始めるためには一生懸命考えて動かなければ楽しいことも生まれないと理解できたのではないのでしょうか。ありがとう。M

【付表2】授業評価アンケート

アンケート2

以下の項目で、該当する評価を○で囲んでください。

I この授業の受講生として、					
1 私は、この授業への出席状況(遅刻・早退を含めて)良かった。	5	4	3	2	1
2 私は、この授業への出席状況授業中よく私語をした。	9割以上	8-7割	6-5割	4-3割	3割以下
4 授業の目標が毎回明確に示されていた。	5	4	3	2	1
5 授業の内容が毎回把握できた。	5	4	3	2	1
6 教室全体として私語が少ない。	5	4	3	2	1
7 私語をした学生を先生は注意した。	5	4	3	2	1
8 先生は準備をして授業に臨んでいる。	5	4	3	2	1
9 先生は情熱のある授業をしている。	5	4	3	2	1
10 先生は質問に適切に答えてくれる。	5	4	3	2	1
11 この授業全体に満足している。	5	4	3	2	1

\* なにかあれば記入してください。